

人の輝き記し100号超

四国中央 元教員合田さん(95)の月刊同人誌

15人寄稿文字・挿絵手がき

四国中央市豊岡町の元教員合田弘さん(95)が月1回発行する同人誌「にげんの広場」がこのほど、100号を超えた。中学生を含む県内外の15人ほどが寄稿し、自身の近況や教育、社会問題などを語り心通わせる場となっている。今も自ら寄稿し手作業で編集する合田さんは「この年まで生きられるとは思わなかったし、知らぬうちに100号になった。長い旅の「こまですな」と気負わず語る。

小中学校の教員だった合田さんは、退職後の1980年から地域の子どもたちへ日常の出来事をテーマにした「生活作文」を指導し、作文誌「山じ風」を毎月発行。しかし学習塾に通う子の増加などで希望者が減り、2008年に307号で終刊となった。

同年7月、大人になった教え子やその母親、合田さんの活動に賛同する県内外の人たちの手紙や寄稿文を冊子にまとめた「広場」の発行を始めた。今月で101号となった。この数年、広場の話題の中心は子どもで唯一参加している不登校の中学生の作文だ。合田さんは中学生に「悪い部分を指摘するのではなく、内なる可能性を見つけて引き出す」という現役時代からの指導法を実践。「世間でだめと言われている子にこそ、いい子と言われている子にはない輝く面がある」と、作文に温か

な「評」を付け続けた。作文を通し子どもの良い面を再認識した中学生の母親や祖母も寄稿するようになったという。中学生は99号に勇気を出して学校に行き運動会に参加したこと、100号には秋祭りを楽しんだ様子を生き生きと書いていく。同人からは「がんの手術前に作文に励まされた」「うれしくうれしくて元気が湧いてきた」など成長を喜ぶ便りが次々寄せられている。

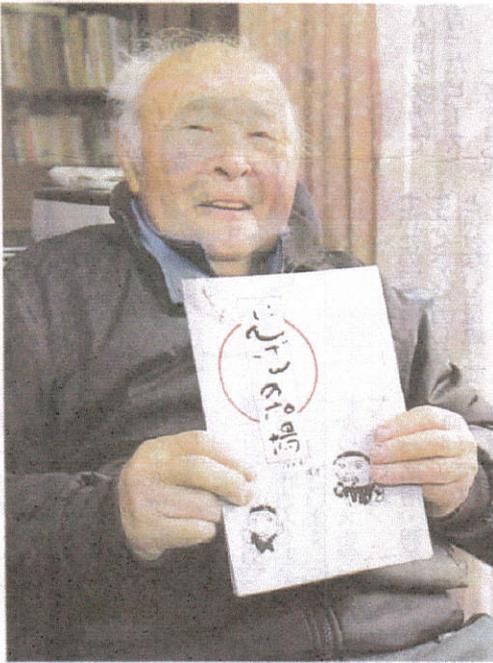
編集は山じ風と同様に合田さんが原稿を手書きで「文字一字写し、挿絵も描く。製本も手作業する。

山じ風の時代から高齢の合田さんの作業を手助けしている元教員伊藤司郎さん(72)は「同市豊岡町」は「子どもたちの成長の芽を伸ばしきれていないのは社会や学校、家庭の責任。合田さんの教育を学び、広く伝えていきたい」として、実践記録を教員の研究会などで後輩たちに発表している。

(村上直子)

PC・携帯
動画三つズ

映像版は13日午後7時20分ごろから、愛媛CATVの愛媛新聞リポートで放送します。15日午後3時20分まで再放送あり。放送後、愛媛新聞ホームページでも視聴できます。



にげんの広場100号を手にする合田さん
＝11月28日、四国中央市豊岡町

愛媛退教協 会員 合田弘先生です。